



乙女ゲームの悪役なんて  
どこかで聞いた話ですが 3

柏てん  
Ten Kashiwa

RB

レジーナ文庫

登場人物  
紹介

ミハイル

騎士団員。  
戦術の天才。  
悲しい過去が  
あるようだが……

ゲイル

騎士団員。  
ミハイルの側近。  
優しい性格で  
心配性。

カノープス

メイユーズ王国の  
近衛隊長。  
仕事熱心で  
真面目なエルフ。

ジーク

メリス侯爵家の長男。  
次期侯爵で、  
アランの成人祝いの  
夜会を仕切る。

アラン

メリス侯爵家の次男で、  
シャナン王子の学友。  
リシェールに何かと  
つかかってくる。

シャナン

メイユーズ王国の王子。  
魔法をかけられて  
リシェールに関する記憶を  
失っている。

レヴィ

シャナン王子の学友。  
変わり者で  
食えない性格。

ベサミ

シャナン王子の  
世話役。  
人と精霊の  
ハーフ。

ヴィサーク

リシェールの契約精霊。

ルシアン

シャナン王子の  
学友。大人しく、  
いつも一人ている。

リシェール

乙女ゲーム世界に  
ヒロインのライバルとして  
転生した少女。  
だけどひょんなことから  
悪役ルートの回避に  
成功して……？

## 目次

乙女ゲームの悪役なんてどこかで聞いた話ですが 3

7

書き下ろし番外編

家族になりたい！

361

乙女ゲームの悪役なんてどこかで聞いた話ですが 3

## 1 周目 ルシアン・アーク・マクレーン

私には名前が三つある。以前の名前はリシエール・メリス。現在の名前は、リル・ステイシー。

そして今、表向き使っているのは、ルイ・ステイシーという偽名——男の子の名である。私は男の子の格好で、ここメイユーズ国の王太子の学友をやっているのだ。

ここに至るには、長い道のりがあった。

日本で普通にOLをしていた私は、交通事故で前世を終えて、転生した。その転生先が、『恋するパレット』空に描く魔導の王国』、略して『恋パレ』という乙女ゲームの世界。ちなみに乙女ゲームとは、女性向け恋愛シミュレーションゲームのことだ。

自分が転生したことに気づいたのは、五歳の時。流行病で母を亡くし、そのショックで私は我を忘れた。そして秘めていた膨大な魔力を暴走させて、西の精霊王であるヴィサークを呼び出し、彼を私の契約精霊にしてしまったのだ。その最中に、自分が恋パレ

の主人公のライバル、リシエール・メリスだと気がついた。

私は生まれてからずっと母親と下民街げみんがいで暮らしていたが、父親はこの国の有力貴族であるメリス侯爵。私がヴィサークを呼び出すほどの魔力を持つことが明らかになると、利用価値を見出され、メリス侯爵家に引き取られた。その流れは、ゲームの設定そのまま。

ゲーム通りにストーリーが進行すれば、最悪の場合、命を落とすこととなる悪役キャラとして、私は生きることに。

将来を危惧きぐした私は、どうにかしてリシエールの悲惨な運命から逃れようとしていた。そんなある日、乙女ゲームの攻略対象キャラクターで、この国の王太子シヤナン殿下に私は命を救われた。そしてなぜか悪役回避に成功した私は決心した。

いつか、彼にお仕えし、この恩を返そうと。五歳の私は、メリス侯爵の正妻——義母に国境付近の森に捨てられながらも、様々な人の助けを借りて王都に舞い戻ってきた。その時に手を貸してくれた騎士団員ゲイルは、私を養子にしてくれた。そのあと、従者として騎士団で働いたり、いろいろな事件に巻きこまれたりして今に至る。事情があつて、従者はやめてしまったのだが、王の勅命ちよくめいで王子の学友になった。

八歳になった今の私は、王子にとってはただの学友にすぎない。しかも殿下は、私を助けてくれた時に倒れたのがきっかけで魔法をかけられ、私に関わる記憶を失っている。

それでも私は、自らの決意を果たすために今日も勉学に精を出しているのだ。

\* ❖ \*

季節は黒月——十月の終わり。昨日わかった試験の結果で、私は十四人の学友のうち成績上位四名に与えられる名誉、『王子の四肢』の一人になった。そのあと、ふと思いついて草原でゲームの内容を整理していたのだけど——学友の一人について、とても気になる情報を思い出した。私は彼が心配になり、この世界でゲームシナリオが現実になっているかを調査することにした。

そして今日、王太子宮にある学習室——王子とその学友が集う部屋にほど近い回廊で、私は目的の人物を見つけた。

彼は人気のない裏庭に置かれたベンチに、ぼんやりと座っている。今まで特に彼とは接点のなかった私だが、彼に直接確かめたいことがあって探していたのだ。

「失礼。隣、いいかい?」

私が尋ねると、彼は一拍置いてうなずいた。

できるだけさり気なく、彼の隣に座る。

彼は、ルシアン・アーク・マクレーン。彼も恋バレの攻略対象の一人であり、私と同じ王子の学友だ。

涼しげな新緑色の目と、赤茶色で艶のある髪。彼は学力においては、学習室でぶっちぎりの一位だ。ただ、剣やマナーは平均以下で総合点が下がるため、『王子の四肢』の第二席に位置している。同時にマクレーン伯爵家の継嗣でもあった。

隣に座ったはいいいけれど、私はなんと切り出せばいいのか悩み、おずおずと言う。

「くつろいでいたところ、突然すまないな」

「いや、問題ない」

彼は言葉少なだが、私の存在を不快に感じているわけではないらしい。

とはいえ、彼は無表情のままだ。私は、彼が感情を露わにしているところを見たことがない。

その性格も雰囲気も、私の記憶にあるゲームのルシアンとは違っている。ゲームの中の彼は、胡散臭く笑う策略家タイプだったはずなのだ。今の彼と同じなのは髪と目の色くらい。おかげで、最初は彼が攻略対象だと気づけなかった。

そして私は、彼にどうしても聞かなくてはならないことがある。

「君は、あの家から逃げる気はないのか?」

言いながら、ルシアン腕を掴んだ。彼は驚いて、私の手を振り払おうとする。私は無理やり服の袖をまくりあげた。

そこには無数の打撲痕と、何かを押しつけられたような火傷の痕がある。

私はこみ上げてきた怒りと吐き気を、どうにか抑えた。

そして、私は確信を持った。この世界が、私がプレイしていた商業版のゲームではなく、そのプロトタイプ版——初期の恋バレであると。初期のゲームは残酷なエンディングが多く、過激な内容を含むものだったらしい。私はプレイしていないから聞いた話なのだけど、初期のゲームのルシアンには、幼少の頃から、母親に暴力を振るわれているという設定があったそうだ。

「こんな、ひどい……」

気づけば私は、光の魔法粒子——魔力の粒を手に集め、彼の腕をさすっていた。柔らかい肌刻まれた傷が、徐々に薄くなる。魔導を使わなくても、光の粒子には治療の力があるのだ。しかしこんなのは、一時しのぎにすぎない。

「逃げるのならば、力を貸す」

「へっ、人間ってやつは、そこらの獣よりよっぽど野蛮だな」

私のそばに浮かんでいた、契約精霊のヴィサーク——ヴィサー君が吐き捨てるように

言う。

本来は巨大なホワイトタイガーみたいな姿のヴィサー君。でも普段は、この猫ほどの小さな姿をしている。小さなヴィサー君の声や姿がわかるのは、魔力がとても強い人のみだ。ルシアンには見えていないだろう。

私は彼に返事をしなかったが、その言葉に心の中で同意した。

「君は……一体？」

不思議そうな顔のルシアンが、何か眩しいものでも見るかのように目を細める。

彼の表情には、いつもの凍てついた表情の裏に隠された、年相応の幼さがにじんでいた。

とりあえず焦ってはいけないと、私は少し言葉を交わしただけでルシアンと別れた。

彼の問題は、一朝一夕には解決できない。一度帰って対策を練る必要がある。

そう考えながらベンチのすぐ後ろにある建物の角を曲がったところで、予想外の人物に出会った。

そこにいたのは、私の血縁上の兄であるアラン・メリス。

彼は優秀で、王子の四肢の第一席『右腕』だ。プライドの高い彼は、平民出身で学習室に通うルイの存在を嫌っていた。彼は、私が血のつながった異母妹リシエールである

ことを知らない。

厄介な人に会ったと思いつつ、大丈夫だと自分に言い聞かせる。ベンチの周りには、ヴィサ君に防音の結界を張ってもらっていた。アランにはルシアンとの話を聞かれてはいないはずだ。

私は小さく目札をして、足早に彼の前を通りすぎようとした。

「下民が、惨めに仲間集めか？」

ところが、そう囁かれて足が止まる。頭上ではヴィサ君が不機嫌そうに唸った。

「ルシアンを懐柔しても、お前の利益にはならんぞ」

「……なんの事をおっしゃっているのか」

私の低い声に、隠しようもない険がまじる。

ルシアンの傷を見て、私は彼と自分を重ねた。メリス家で私がどんな仕打ちを受けても、無関心だった兄上。義母が何をしようとも、二人の兄上は会いにすら来てくれなかった。

「無駄だぞ。あれに何かを動かせるほどの権力はない」

アランは吐き捨てるように言った。平民はおるか同じ貴族であるルシアンのことすら、『あれ』と言ってはばからない。彼はそういう少年だ。

プツリと、頭の中で何かが切れた。

「『あれ』なんて言うな！」

突然叫んだ私の剣幕に、アランは驚いたらしい。目を見開いて私を見る。

「貴族の何が、そんなにえらい？ いい家に生まれたからといって、なぜ人を見下すことが出来る？ 同じ人間だろう！」

言い終えてから、しまったと思った。学習室を仕切る彼に楯突けば、ただでは済まない。しかし意外なことに、アランは黙りこんだ。普段なら嫌味を返してきてもおかしくないのに。

「……失礼」

我に戻った私は、急いでその場を離れようとした。

しかし彼に手首を掴まれ、足が止まる。

「ツ……マクレーンは危険だ！」

アランにかけられた言葉の意味も考えず、私は彼の手を振り払うと、夢中で走り去った。

\* ❖ \*

「貴族を取り締まる法律がない？」



素<sup>す</sup>つ頓<sup>とん</sup>狂<sup>きやう</sup>な私の声を、ミハイルは迷惑<sup>めいわく</sup>そうに聞いていた。

騎士団員の彼も攻略対象キャラの一人。国境近くの村で、彼が私の魔力の強さに気づいて保護<sup>りやうご</sup>してくれて以来のつき合いである。

ここは騎士団の寮<sup>りやう</sup>にある彼の部屋だ。今日の講義が終わった今、ルシアン問題への対応を考えるべく、私はミハイルに貴族社会のことを聞きにきている。

ミハイルは執務用の椅子に、私は一人掛けのソファに体を預けていた。

「ああ。この国の騎士団や治安維持隊の取り締まり対象に、貴族は入っていない。貴族とは人民の手本となる者。つまり、はなから間違いないなど犯<sup>おか</sup>さないと言うわけだ」

言葉とは裏腹に、皮肉げにミハイルは言った。

「じゃあ、貴族はどんな非道な振<sup>ふ</sup>る舞<sup>ま</sup>いをしてもお咎<sup>とが</sup>めなしなの？」

私の非難に、ミハイルは苦笑<sup>せうきやう</sup>しげに答える。

「基本的には。……しかし、貴族は何よりも矜<sup>プライド</sup>持<sup>い</sup>を大切に生きる生き物。だから自らの恥になるようなことはしないし、博愛の精神で寄付や奉仕活動なども率先<sup>おせいな</sup>して行<sup>お</sup>う。まあ、金<sup>かね</sup>だけば撒<sup>ま</sup>いて、あとは知らんふりの輩<sup>やう</sup>が多いのが実情だが。つまり、それほど悪<sup>あく</sup>さはしない——表向きはな」

ミハイルは悪<sup>あく</sup>ぶった物言<sup>ものごと</sup>いで続ける。

「しかし裏では、どんな悪事に手を染めてても不思議じゃない。貴族社会ってのは、本当に魑<sup>ち</sup>魅<sup>み</sup>魍<sup>やう</sup>魎<sup>りやう</sup>の世界だ」

伯爵家の末子であるミハイルの顔には、明確な蔑<sup>さげす</sup>みの色が見て取れた。

「裏で貴族が何をしていようと、本当に誰も非難<sup>せいなん</sup>することはできないの？」

「貴族を罰<sup>ばつ</sup>することができる法律はないが、さすがにまったくの野放<sup>のほう</sup>図<sup>ず</sup>でもない。貴族の儀礼を定めた『貴族憲章』によると、『天に恥<sup>ち</sup>ずべき行為は改<sup>か</sup>めよ』とある。この『天に恥<sup>ち</sup>ずべき行為』への解釈は、学者によって様々で……」

「あー、今はそういうの、いいから」

「そういうのってお前<sup>まへ</sup>な。俺<sup>おれ</sup>は仮<sup>かり</sup>にもお前の教師だぞ」

ミハイルは私の個人的な教師であり、学習室の講師でもある。

最初は嫌々だったくせに、自ら教師を名乗<sup>な</sup>ってくれるとは。なんて感慨はさておいて――

「例えば、貴族が自分の子供に暴力を振<sup>ふる</sup>るっているとして、それをやめさせられる？」

「おい、まさかまた余計な問題に首<sup>くび</sup>を突<sup>つ</sup>っこむつもりか？」

「いいから！ 教え子の質問には的確に答えて。それが教師の役目でしょ？」

私がそう言うと、ミハイルは鼻を鳴らした。

「二年前を忘れたのか？ お前は本当に俺達に迷惑と心配をかけるのが得意だな」  
痛いところを突かれて黙りこむ。

二年前、この国で王弟の反乱騒ぎがあった。その時私は、養父母であるゲイルとミーシャ、それにミハイルにかなり迷惑をかけたのだ。それは充分わかっている。

でも、親に暴力を振るわれている子供を放ってはおけない。

親に否定される苦しみや孤独は、痛いほどわかる。私の実父であるメリス侯爵は、私に一切興味を持たなかった。義母は私を狭い部屋に閉じこめ、疎んでいた。

私には実母に愛してもらった思い出があったが、ルシアンには誰もいない。あの表情を失くした子供を見捨てることなど、できるはずがない。

「……今度は迷惑をかけないよ。最悪、ゲイルと親の縁を切っても、私はあの子を助ける」

「馬鹿がッ！」

『オイッ！』

ミハイルは椅子から立ち、私の両肩を掴むと、ソファの背に押しつけてきた。驚きで体が固まる。

ヴィサ君はソファの背にのり、今にもミハイルに飛びかからんばかりに、体を低くし

ていた。彼の唸り声が頭に響く。

目の前にあるミハイルの金の瞳が揺れている。乱暴な行動とは裏腹に、彼は悲しげに顔を歪めていた。

「お前……俺達が、迷惑をかけられるのがいやだから、お前を縛っているとでも思っているのか！ どうしていつも、自分だけでどうにかしようとする？ どんなに大人びていても、お前はまだ八歳の子供なんだぞ！」

ミハイルの目には切実な光があった。

私の胸に、じわじわと罪悪感が湧いてくる。

「ミハ……イル？」

私が掠れた声で呼ぶと、ミハイルは我に返ったように体を起こした。そしてすぐに気まずそうに目を逸らす。

「……どこ痛めたところは？」

「ううん。大丈夫。あのね、ミハイル……ごめん」

すると、謝罪の言葉が出た。ミハイルがひどく、傷ついた顔をしていたから。

「いや……とにかく、何かするら必ず俺達に相談しろ。お前はもう、一人じゃないんだから」

ミハイルは、綺麗な赤い髪をガシガシと掻いた。ゲームの中の彼は、ひたすらに俺様で変わり者。主人公より十歳上で、いつも余裕たっぷりなキャラだ。だから私は彼のことを、心のどこかで自分より圧倒的な大人だと思っていた。

けれどそれは、あくまでゲームが開始される今から八年後の彼であって、今のミハイルはそうじゃない。二年も彼の近くにいたのに、彼の本質に今日はじめて触れた気がした。部屋には、火の魔法粒子が舞い散っている。火属性であるミハイルが、感情を高ぶらせて発したものだ。押さえつけられていた肩が、熱い。

私達はお互いに黙りこんだ。

「……法律はないが、貴族には厳しい掟がある」

次に口を開いたのは、ミハイルだった。

「掟？」

「ああ。下位の貴族はこれを恐れて、大きな悪事を行わない。この掟こそが貴族の規律を保っていると言っても過言じゃない」

「なに、それ。その話を最初にしてくれれば」

「お前が途中で余計な茶々を入れたんだろうが。けど、それを行使するのは簡単じゃな

いぞ。その掟とは、『己より上位の者には決して逆らってはならない』だ。上位の者に『天に恥ずべき行為を行っている』と指摘されたら、貴族はそれを必ず改める必要がある。さらには厳罰が下され、家名にも傷がつく。今後に差し障りかねないから、下位の貴族は悪事を控えるんだ。ただ、貴族が他家の事情に口を出すなんて、よっぽどだぞ。頼んでホイホイとやつてもらえることじゃない」

つまり、格上の貴族あるいは王族から注意されれば、従わないわけにはいかないのか。私は腕を組んで考えこんだ。

マクレン家は伯爵家。その上となると、侯爵家か王家しかない。

私の実家の位は侯爵だが、すでに縁は切れている。それどころか、私を放逐した義母に生きていることがバレれば、命を狙われるかもしれない。どう考えても、頼れない。ミハイルのノッド家は伯爵、ゲイルのステイシー家は子爵だ。今のところ頼れる相手は思い浮かばなかった。

「そう……」

とてつもない無力感に沈む。この世界で私の前に立ちはだかるのは、いつも身分の壁だ。「とにかく、俺もできる限り調べてみるから、今は大人しくしている。派手に行動してメリス家に目をつけられたくはないだろう？」

真剣な目で言い聞かせるミハイルに、私は力なくうなずいたのだった。

\* ❖ \*

学習室入りしてから今まで、私は自分のことに必死すぎたみたいだ。全然気づいていなかったが、無口で異様に頭がいいルシアンは、学習室の中で浮いていた。

そんな様子を見ていられず、私は積極的にルシアンに話しかけるようになった。彼はいつも無表情だけど、不思議と私の誘いを断ったりはしなかった。

今日は東屋あずまやで私のお手製弁当を二人でつつく。

ルシアンは小食なのに、私は張り切って作りすぎてしまった。ガリガリに痩やせたルシアンに少しでも食べてほしくて、弁当箱へぎゅうぎゅうに詰めてある。

ふと見ると、ルシアンは唐揚げを凝視ぎょうししていた。物珍しいのだろう。小学生男子に人気のある弁当のおかずを思いつく限りを詰めこんでみたが、そういえば私の料理は、こちらの世界ではまったく知られていないものばかりなのだ。

「大丈夫。おいしいよ」

そう言いながら、私は唐揚げを一口に放りこんだ。ジワッと溢れた肉汁に味が染み

ていて、おいしい。前日から準備した甲斐かひがあった。

ちなみに、この世界には鶏にわとりがないので、味が似ているオロロン鳥を使用。酒も醤油しょうゆもなくて下味をつけるのに苦労したが、いい味になっている。

おずおずと、ルシアンも唐揚げにフォークを伸ばした。その姿はどこかきこちない。

学科は敵なしのルシアンだが、テンプルマナーや剣技などの成績は平均以下。そのせいで総合点ではアランに負けてしまう。同じ学友で攻略対象でもあるレヴィに聞いたところ、ルシアンは社交の場にもほとんど出てこないらしい。これは貴族の子息ではありえないことだ。

彼の母親が何を思って彼にそういう教育を施ほどこしているのか、私にはわからない。

「ここでは見ている人もいないし、自由に食べていいかな？ マナーは私には窮屈きゆうくつで」

ルシアンに気兼ねしないでほしくてそう言うと、彼は少しだけ驚いた顔をする。

私がマナーを無視してお弁当を食べはじめたら、ルシアンも他の料理に手を伸ばしはじめた。

ルシアンはほとんど話さないの、二人でいると自然と私ばかりが喋しゃべることになる。しかし前世では飼あわい犬の青星あおほしとよく一緒にいた私は、喋しゃべらない相手は大得意。話すのは、私のなんてことのない失敗談ばかりだけだ。

ひたすら食べるルシアンは、水分を取り忘れ、たまに料理をのどに詰まらせたりする。そこで彼に適度に飲み物をすすめていると、まるで自分が母親になったような錯覚に陥った。

私と食事をしている時、ルシアンはいつも落ち着かない風情だ。おそらく、他人との食事に慣れていないのだろう。その理由を思うと、つらかった。

ルシアンのことを考えていたら、私は食事の手が止まってしまっていたらしい。いつのまにか彼も手を止めて、私を見ていた。

「ああ、ぼうっとしてしまった。失礼」

誤魔化すために私が笑うと、ルシアンの口元がわずかに上がる。

はじめて見るルシアンの笑顔だ。

「わ、笑った……」

感動する私に彼が不思議そうな顔をしたので、私は慌てて首を横に振る。

「いや、なんでもない！ さあて、私の帰りの荷物を減らすのに協力してくれよ。ルシアン」

そう言った私に、ルシアンはもう一度ささやかな笑みを見せてくれた。

それから数日後。

私はルシアンと一緒に東屋でお弁当を食べていた。

まったく余計なのだが、今日はなんとレヴィも一緒だ。

彼は王子の四肢第三席で、騎士団長の遠縁にあたるマーシャル子爵家の継嗣である。

彼は生粋の貴族なのにかなり変わっていて、下民街の孤児をまとめる銀星王という役割を担っている。私は学習室にもぐりこむため、彼にいろいろと協力してもらった。

しかし、あくまでビジネス上のつき合いだ。プライベートでは極力近づかないようにしている。なぜなら彼は、勝手に私のファーストキスを奪っていった最低男だから。

「これは、一体どうやって作るんだ？」

過去の出来事を思い出して遠い目をしていたら、ルシアンが尋ねてくる。

私は驚いた。何事にも興味なさげなルシアンが、はじめて自発的に発言したのだ。嬉しさのあまり飛び上がりそうになった。

彼のフォークの先には、きつね色のオロロン鳥の唐揚げが刺さっている。ここ数日で、それはルシアンの好物になったようだ。

「それはぜひ、私も知りたいところだな」

話に入ってくるレヴィを無視し、私はうきうきしながらルシアンに答える。

「オロロン鳥のモモ肉を一口大に切って、下味と粉をつけて揚げるんだ」  
簡単に説明したが、ルシアンにはイメージしづらいようだ。彼は不思議そうにフォー  
クの先の唐揚げを見つめている。

「そうだ！ 今度一緒に作ってみる？」

本当に軽い気持ちで、私はそう言った。

ルシアンが何かに興味を持ったのが嬉しく、浮かれていたのだ。

「それはいいな！ 楽しそうだ」

「君は誘ってない」

レヴィの言葉にツツコミを入れてみると、突然東屋に人が近づく気配がした。

「何を作ると？」

現れたのは、驚いたことにシャナン王太子殿下その人だった。彼の後ろには、腰ぎん  
ちやくのようにアラン兄上とその他の学友がくっついていてる。

私とルシアン、レヴィは慌てて膝をつく。

今日は学習室から遠い東屋で食事していた。誰も来ないだろうと、ヴィサ君に防音の  
魔法をかけてもらうのを怠ったのが悔やまれる。

「報告があった。欲をかいた平民が貴族子息に取り入り、王宮内を混乱させようとして

いると」

『欲をかいた平民』という言葉が、胸に突き刺さった。

三人の中で、平民なのは私しかない。他の人に何を言われても平気だが、忠義を捧  
げたい唯一の人に疑われるのは、やはりつらかった。

「殿下、それは誤解にございます」

フォローしてくれたのは、レヴィだ。

「この者、ルイ・ステイシーはその名の示す通り、ステイシー子爵家に連なる者。そし  
て我らはただこの場で交誼を深めていただけにございます。彼の学習室入りは国王陛下  
の勅命によるもの。さすれば、その尊きご意向に従い、彼に新しきを学ぶのが我らの正  
しき道と存じております」

普段のふざけた調子はどこへやら。煙に巻くような演説に、殿下以外の学友達は啞然  
としている。

「殿下、レヴィの言う通りです。私達は陛下のご意向に従ったまで」

ルシアンも静かに意見する。私だけが、言葉もなく俯いていた。もし今顔を上げて、  
王子の目に冷たい光が宿っていたら、打ちのめされるに違いないからだ。

場には沈黙が落ちた。王子の取り巻き達は、静かに殿下の反応をうかがっている。

「顔を上げよ」

かけられた王子の声は冷たい。

私はゆっくりと顔を上げ、王子の口元を見つめた。彼の目を見る勇氣は、なかった。「……では、お前達は何を学んでいたと?」

殿下の言葉は冷たかった。彼は本当に、あの明るく優しくかった王子なのだろうか?

「ルイの知る異国の料理について、学んでおりました」

レヴィがお弁当を王子の前に差し出す。

あー……。絢爛豪華な食事に慣れているお方に、私の作った弁当をお見せするなんて。

知っていたら、もっと工夫したのに! 昨日の夕食の残りは入れなかったのに!

私はとてつもなく後悔する。

しばらくお弁当をじっと見つめていた殿下は、残っていた唐揚げをモグツと食べた。

「——ッ!」

その場にいた者は息を呑み、驚愕で顔を歪ませる。ルシアンだけは相変わらずの無表情だった。

「へ、殿下! そんな得体の知れない……毒見も済んでいないものを!」

「お戻しください! どんな厄災があるか」

取り巻き達が慌てふためく。

失礼な。直前まで私達が食べていたというのに。そう心の中でツツコミを入れつつも、私の混乱は彼ら以上だった。

わ、私の唐揚げモドキが殿下のお口に。ちゃんと火、通ってたよね? お腹を壊したりしないよね?

「——うむ」

ゆっくり咀嚼し終わると、殿下は言った。

「確かに、お前達の言い分はもっともだ。では、ルイには皆で学ぶとしよう」  
何を言い出すんだ、この王子様は。

\* ◆ \*

「では、今から『片栗粉』を作ります」

ここは、私にとってはお馴染み、騎士団の寮にある食堂の厨房。料理人や使用人、そして学友御一行様が見守る中、私は麻袋からじゃがいもそっくりのポツテという野菜を

取り出した。

ギャラリーの中の数人が、驚いたように身動きする。

この世界のポツテは、その芽が毒を持つことから、昔は『悪魔の植物』と呼ばれて恐れられていた。現在は安全性が証明されているが、あまりポピュラーな食材ではないのだ。

ああ、もつたいない！ これを蒸かして塩コショウをかけバターをのせるだけで、どれだけおいしいか！

あ、この世界にバターはないんですけどね。

騒ぎになってはいけないからと、学習室の面々は『ルイの友人』という紹介でここにいる。

しかし仮にも城内で働いていて、王太子の顔を知らない者はいない。

料理長は最初、顔を引きつらせ、目だけで私に事情を尋ねていた。その様子には鬼気迫るものがある。学友の監督として同行した王子の付き人ベサミは、『また面倒なことを』と苛立ちを隠そうともしない。そのどちら共にも、私は気まずい笑みを向けるより他なかった。

「これはポツテという植物で、寒さに強く荒れた土地でも育ちます。またその収穫量は、パンに用いるシユピカの三倍にもなります。この作物の原産地である北方の国では、ポツ

テによって飢饉による餓死者が大幅に減ったという記録もあります。様々な食材との相性がよく、栄養も豊富です」

暗記してきた内容を素知らぬ顔で話すが、内心は冷や汗ものだ。ちなみにシユピカは、この世界にある小麦そっくりの穀物。私はその粉を小麦粉のかわりにしている。

先ほど身動きした使用人や学習室の面々は、驚いた顔をしていた。

ルシアンは相変わらずの無表情で、王子とベサミはまるで私を値踏みするような顔だ。下民街で食べたことでもあるのか、レヴィは涼しい顔をしている。

私は無理やり笑顔を作った。失敗は絶対に許されないのだから。

王子と将来国で重要な役職を占めるであろう学友達。彼らに料理を教えることになった時、私は大変だと戸惑う反面、チャンスだとも思った。今まで言いたくも言えずにいたことを、彼らに伝える絶好の機会だ。

今までずっと疑問だった。どうして学習室のカリキュラムには、国民の暮らしや問題点を考える授業がないのかと。

学習室での授業は、歴史や帝王学、それに剣技やマナーに重点が置かれている。それが悪いわけではない。ただ少しでも、私は知ってほしかった。この国に、私達と同じ年で飢えて死ぬ子供がいることを。貴族の世界からは決して見えない闇が、確実にあるの



だ。

自己満足かもしれない。しかし少しでも、彼らが国民の暮らしに興味を持つきっかけになったらいい。

「ポツテが我が国で『悪魔の植物』と呼ばれているのは、この芽を食べた人が食中毒を起こした例があるからです。しかしそれらの部位を取り除きさえすれば、まったく問題ありません」

前世の家の唐揚げ粉は、小麦粉と片栗粉を七対三の割合でブレンドしていた。シュビカの粉だけでも唐揚げは作れる。手間を考えれば、シュビカだけで作るべきだろう。

でも私は、このポツテという植物を王子達に知ってほしかった。

かつて人々を、飢饉から救ったこの植物を。

私がベティナイフでちょびつと出ていた根っこをくりぬくと、ギャラリの中から手が上がった。興味津々な顔のレヴィだ。

「そのポツテというやつは、実から直接根や芽が出るのか？」

「いえ。ポツテは実ではなく、地中の茎が膨らんだ部分です」

学習室の数人が眉をひそめた。

貴族の間には、植物の根は平民の食べ物だという認識がある。

しかし彼らが知らないだけで、地中にできる食べ物は意外に多いのだ。

「デザートによくかかっているペリシもメレギの根から採れますし、ピッツも地中で殻のある実をつけます。地中にある部分を掘り出した食材は、実は結構多いですよ」

ピッツはこの世界のピーナッツ、つまり落花生だ。

コンデンスミルクに似たペリシやピッツは貴族も口にするが、これらが地中から採取されることを彼らはほぼ知らない。

驚く少年達の後ろで、料理人達が力強くうなずいていた。

今日を迎えるために、私は王都にいる植物学者に面談を申しこんだ。王子に間違ったことを教えられないと、必死だったのだ。そのつけ焼き刃は、今のところちゃんと機能してくれている。

「それでは、ポツテの皮を剥きます」

そう言うって料理長に目くぼせすると、料理長と数人の料理人達が、待つてましたとばかりにポツテの皮を剥きはじめる。いくら料理教室とはいえ、王子や貴族の子息達に皮剥きはさせられない。

そんなことを考えていたら、張り切った料理人達が必要以上にポツテを剥きまくっていた。あつという間に、たらいには白いポツテが山積みになる。

じゃあ、ついでにポットフライを作ろうかな。どうせ油を使うんだし。

「そ、それでは次は、このポットをすりおろします」

私の説明通り、またしても料理長と料理人の一団は厨房用の大きなおろし金で、次々とポットをすりおろしていく。今度はすりおろしたポットの山ができていった。

学習室の面々は、興味深げに、あるいは少し怖気づいたように、その光景を眺めている。「そしてここからが重要なのですが、このすりおろしたポットを布に包み、水で洗います」私はすりおろしポットを適量布に包み、それを水を溜めておいた器の中で揉み洗いしはじめた。料理人達も、同じ作業に取りかかる。

さすがに皆さん騎士団の食堂勤務なだけあって、動きに無駄がなく仕事が丁寧だ。

学友達が飽きていないかなと気にしていたら、予想外の声が上がった。

「ふむ。では我々も体験するか」

王子の眩きに、その場にいた者達は硬直した。もちろん私もその一人だ。

王子……今、なんと？

尋ねる前に、王子は腕まくりしつつこちらへ近づいてくる。

「王子！」

慌てたベサミが声を荒らげた。

学習室の面々は目を白黒させながらも、王子には逆らえずに動き出す。

こうして学友達は華美な上着を脱ぎ、質のいいシャツを腕まくりしてポットの揉み洗いははじめた。

ベサミが恨みがましく私を睨んでいる。

わ、わわわ。これって私の責任かなあ？

呆けていたら、私の手から布に包まれたポットが取り上げられた。慌てて見上げると、相手はルシアンだった。彼は何も言わず、私のかわりにポットの揉み洗いはじめる。

哑然とする私を見て、彼は少しだけ笑った。

「ポット、懐かしい……」

「え？」

貴族であるルシアンがポットを懐かしがるなんて、どういうことだろうか？

そう考えていたら、ルシアンの柔らかい表情は一瞬で消え、すぐにいつもの無表情になつてしまう。結局その眩きの意味は、聞けなかった。

作業が終わる頃には、王子とレイヴィだけが元気で、ルシアンは無表情。残り全員が疲れた顔をしていた。学友達は慣れない作業に対する疲れ、料理人達は完全なる気疲れだ。あとで存分に労っておこう。

「洗い終わったポットをよく絞ったら、そのポットは布にくるんだまま捨ててください」  
「ええ!？」

私の指示に、そこかしこから驚きの声が上がった。

こんなになんばったのにといい恨み言や、低い呻きもちらほら。私はそれに苦笑する。  
「今回使うのは、こちらの水の方です。皆さんのおかげで、ポットの栄養はすべてこちらに溶け出しています」

茶色く濁った水を見て、みんなは疑わしげな表情になった。先に説明しておくべきだったかもしれない。

「しばらく待つと、この器の底にポットのベタベタした部分が沈殿してきます。それまでお待ちください」

「待つとはどれほどだ?」

見事なシャツを見るも無残に汚した王子は、楽しそうに私を見ていた。

この間『欲をかけた平民』と呼ばれたことからは、考えられないような親しみを感じる。

「半メニラほどでしょうか」

一メニラはおおよそ三十分で、半メニラは十五分だ。

「なるほど。では、ベサミ」

「……はい」

命じられたベサミは、不承不承の体で調理台にペンでカリカリとペントクルを刻み、手をかざした。

すると茶色く濁った水が、あつという間に透明に変化する。

「半メニラほど時間を進めました」

こんなことに力を使って不承不承で、とベサミの顔が雄弁に語っていた。あとが怖い。

「そ、それではですね! この水の上澄みだけをそっと捨ててください」

私は慌てて手前にあつた器を手に取り、その水をそっと流した。器には、薄茶色のねばねばとしたでんぷん質だけが残る。一同からは驚きの声が上がった。

「ペリシに似ているな。色はまだ汚いが」

料理長に指摘され、私はうなずいた。

「はい。完全に白くするために、さらにこの工程を二回繰り返します」

繰り返しの工程は、そもそも魔導石を用いた道具を使って時間短縮しようと思っただけだ……。ベサミの力を使った方が早いから、またも王子が無言で命じる。

うう、ベサミが私を睨んでる、睨んでるよ!

三回目の置き時間を二メニラ——一時間にしてもらい、でき上がったのは真っ白でど

るどろとしたものだった。

学友達は興味深そうに、あるいは気味悪げにそれを見つめている。

「これを料理にまぜると、とろみがつきます。今からこれを乾燥させて、さらに保存しやすくしたいと思います」

今度は六メニラ——三時間ほど時間を進めてもらう。

器の中のどろどろはたちまち乾燥して、白く固形化する。やがて表面にひびが浮かんだ。固まったでんぶん質は、ひび割れた大地のようだ。それをスプーンでざくざくと崩すことができ上がる白くなめらかな粉は、前世の片栗粉そのもの。私はそのでき上がりに満足した。小学生の時に理科の授業で学んだ片栗粉の作り方が、まさかこんな形で役立つ日がこようとは。人生、何が起こるかわからない。

「では、この粉とシユピカを挽いた粉をまぜて、オロロン鳥の『唐揚げ』を作ります」私の目的はポツテを知ってもらうことだったので、ここから先は迅速に進める。

昨日のうちに料理長達に切り分けてもらい、調味料に漬けこんでおいたオロロン鳥のモモ肉に、粉をまぶしてティガー油で揚げる。この作業は子供がやると危ないので、全部料理人達にお任せだ。

別の鍋ではあまったポツテを切って揚げ、ポツテフライを作ってもらう。

大量の唐揚げと、そして塩を振ったシンプルなポツテフライが、寮内の一室にあるテーブルに並ぶ。

唐揚げとポツテフライを食べた学友達は、驚きの声を上げた。最後まで積極的ではなかったアランですら、食が進んでいるようだ。みんなを見守る私の顔は、自然とにやけてしまう。

そうだよ、唐揚げはもちろん、ポツテもおいしいんだよ！ だから食わず嫌いしてたら、もったいない。

最後に、唐揚げのレシピと残った片栗粉を全員に配る。少年達は興味なさげに受け取っていたが、それからしばらくして、社交界ではポツテのフライと唐揚げが大流行するこ  
ととなったのだった。



## 2 周目    メイユーズの蜘蛛<sup>くも</sup>

唐揚げを作った次の日から、ルシアンは学習室に来ていない。もう、三日目だ。ベサミや講師達にも連絡がないらしくて、少し妙だ。

初期の乙女ゲームの中では、母親から執拗<sup>しつよう</sup>な虐待<sup>ぎやうたい</sup>を受けたせいで人間嫌<sup>にんげんきら</sup>いだったルシアン。

彼の腕に刻まれた傷痕<sup>きずあと</sup>が、脳裏に焼きついて離れない。

唐揚げを食べていた時には、何もおかしな様子なんてなかったのに。

私の不安はむくむくと大きくなっていった。

その時、近くの庭木がガサリという音を立てたので、私は体を強張<sup>こわば</sup>らせた。

「またか」

「ああ、そうかもな」

私がひそんでいた植えこみの横を、聞き覚えのある声を通りすぎていく。

アランの取り巻きの二人だ。

「陛下はいつまでマクレーン家を野放しにされるおつもりなんだ。いくらなんでも、常軌を逸している」

聞き覚えのある家名に、私は息を呑む。ルシアンの家だ。

「馬鹿！ 誰が聞いているか……」

「こんな寂れた庭、他の学友は存在も知らないさ」

「それにしたって不用心だぞ。沈黙は貴族の不文律だ。不用意な発言で断絶した家は、十指じゃ足りないっていうのに」

「相変わらず慎重派だな。まあ、いいさ。あの忌々しい平民と次のルシアンを出し抜くことができれば、王子の四肢のうち二つは空席になる。望みはあるさ」

（次のルシアン？）

少年の言葉に、私は引っかけりを覚えた。

「あの平民が来てから、アラン様も調子を崩されている。早急に席次を取り返さなくては。まったく平民には厨房の下働きでもさせておけばいいんだ。陛下もお戯れがすぎる」

そう言いながら、彼らは庭園を抜けていった。

次のルシアンとは一体どういう意味だろうか？

何かの鍵になるような気がして、私は口の中で何度もその言葉を繰り返した。

「アラン様」

人のいない回廊。私は相手がようやく一人になったところを見計らい、声をかけた。振り返ったアランは、その年に似合わない鋭さで私を睨みつける。

「なんの用だ」

彼に頼るのは癪だったが、背に腹はかえられない。私は決心した。

「ルシアンについて、お聞きしたいことがあります」

その名前を聞いただけで、アランの秀麗な眉は吊り上がり、その表情は険しくなる。そしてしばしの沈黙のあとに彼が投げた言葉は、予想外のものだった。

「……あいつのことは、もう忘れろ」

私は驚き、一瞬立ち竦んでしまう。その隙に、アランが立ち去ろうと足を早めた。

『待てよ！』

それを遮ったのはヴィサ君が放つ突風だ。アランが驚いたように立ち止まる。

私は必死に彼のシャツの袖口を掴んだ。

「何をする」

「忘れろとはどういうことですか？ あなたは何か知ってらっしゃるんですか!？」

大声で絶つた私に、アランが不快そうな目を向けた。そして、彼はため息を一つつく。「……ここでは誰に聞かれるかわからない。こっちへ」

もしかしたら、畏かもしれない。でも学習室内に親しい友人のいない私にとって、情報を得るには彼を頼るしかなかった。運悪くレヴィは家の用事で遠方に出かけていて、十日は戻らないらしい。それを待っていては遅いのだ。

以前、ルシアンと話していた私に、何かを忠告しようとしていたアラン。

私の行動が気に入らないだけだと思っていたが、もし、そうではないのだとしたら？アランに先導されてやってきたのは、広い客間だった。王宮には、このような客間がいくつもある。しかしそれぞれに特殊な鍵がついていて、勝手に立ち入ることはできないはずだ。

「ここは私が下賜されている部屋だ。入れ」

そこは豪華な内装の割に家具の少ない、なんとなく寂しい部屋だった。

勉強机と、作りつけの本棚。芸術品のようなベンとインク瓶を見ながら、私は思い出す。ゲームの中のアランが、高すぎる気位と矜持を守るためにひたすら努力を重ねていたことを。

この人がただの兄だったなら、そして私がただの貴族の娘であったなら、素直に彼を

尊敬できたはずなのに。

アランは学習机の椅子に腰かけ、私には布張りの高価そうな椅子をすすめた。そして私が座ると同時に、口を開く。

「まずは、深入りしないと誓え」

「深入りとは？」

「マクレーンの家は危険だ。不用意に近づいてはならない」

「一体なぜです？」

「誓うのか？」

「それは話をお聞きしてから決めます」

平然と言いつ放つた私に、アランは頭痛を堪えるように頭に手をやった。

「……マクレーン家は、ルシアンのお母さんであるルーシー殿が、女伯爵として家督を継いでいらつしやる。それはルシアンの父親であるイアン・マクレーン伯爵が、八年前に馬車の事故で亡くなられたからだ」

続けてアランが語ったのは、社交界では公然の秘密になっているという伯爵家の醜聞だった。

没落寸前のマクレーン家の子息に恋をしたルシアンの母親は、実家の侯爵家の力を

使って無理やりにその青年と婚姻を結んだ。しかし、それに反発した青年は家に寄りつかなくなり、結局浮気相手と一緒に馬車で谷底に落ちたとか。

私は愛のない両親の間に生まれたルシアンに同情した。しかし、貴族の家ではよくある話だ。それがなぜマクレーン家に限って、特別視されているのだろうか？

私の疑問を読み取ったのか、アランは面倒そうな顔でこれからが本題だが、と前置きした。

「おそらく学習室とそれに関わる人間しか知らない話だ。そして、誰もが口をつぐんでいる」

「一体何を？」

「先代の伯爵はルシアンと同じ赤みがあった茶髪と、新緑のような黄緑色の目をしていた」

「はあ……」

私はアランが何を言いたいのかわからず、間抜けな相槌を打つ。

次の瞬間、話は予想もしない方向へ進んだ。

「しかし、ルシアンの顔は先代とは似ても似つかない。そして、現伯爵である実の母上とも」

アランの言ったことが、一瞬理解できなかった。

「ルシアンは、定期的に違う人物に入れかわるのだ。いつも無表情で信じられないほどに優秀だが、数年あるいは数ヶ月に一度姿を隠す。その後現れるルシアンの目と髪の色、魔法属性は変わらない。しかし顔つきや体格の違う、まったくの別人だ。——誰も関わり合いを恐れて、決して指摘しないが」

どこか疲れたように、アランが言う。私は言葉を失くした。

伯爵子息を名乗る別人が、学習室にやってくることなど、果たしてありえるのだろうか？

学習室は王子の学び舎。そして、高位にある貴族の子息達が友好な人間関係を育む場所だ。

そんな場所に正体不明の人物を送りこむことなんて、できるはずもない。そのまま信じるには、アランの話はあまりにも突飛すぎた。

「だって、それじゃあ……」

私が接した、唐揚げをおいしそうに食べていた彼は、一体誰だったというのか。混乱していると、いつのまにそばまで来ていたのか、アランが私の肩に手を置いた。

「王家の者がマクレーン家を不問に付している理由はわからない。しかし、何かが起こっ



ていることは確かだろう。命が惜しければ近づくな。貴族にとつて、平民を消し去るなどたやすいのだから。そんなこと、お前が一番よくわかっているだろう？ ルイ。いや……リシエール・メリス」

ぐるぐると頭を回転させていた私は、彼の呼びかけで思考を止めた。相手を見上げれば、透き通った榛色の目が私をじっと見下ろしている。

呼ばれた真の名前に、息を呑んだ。アランのまなざしは真剣で、とても逃れられそうにない。

「ご存じでいらつしゃったのですね……」

目を逸らした私の肩を掴む手に、力がこもった。

「なぜ戻った!? もし母上に見つかれば、今度こそ何をされるかわからないのだぞ！」

まるで私を心配するような物言いに、イラッとした。

私はそれを覚悟の上で、王都に戻ったのだ。王太子殿下のために。

「母上に、告げ口なさいますか？ あるいは王子に？ ペサミに？ 私が女だと告げなくても、兄上ならば私こときたやすく放逐できるでしょうね」

必死に机に齧りつく私を、アランはどう見ていたのか。

さぞ、馬鹿げていると思ったことだろう。側女の子供のくせに、と。

冷静さを心がけていたけれど、心がどんどん乱れる。ヴィサ君が心配そうにクーンと鳴いた。

こんなことをしている場合ではないのに、かつて私を見捨てた相手と思えば、冷静ではいられない。

「私を、追い出せばいいでしょう。あなたの無慈悲な母親と同じように。そんなぬるい同情はいらない！ いくら蹴り落とされても這い上がって、私は何度でもあなたの目の前に戻ってくる。所詮は下民風情と侮っていい。親も兄弟も、もう私には関係ない！」

勢いそのまま胸の奥に充滿する毒を吐き出せば、アランの顔が歪んだ。

「馬鹿な！」

頬を襲う衝撃。アランに頬を叩かれたのだ。

私の体は吹き飛ば。椅子から落ちて、床に叩きつけられた。

既視感を覚える。アランの髪の色も目の色も、私にひどく接した義母のそれによく似ていた。

『ごんのかきが！』

『やめて！』

牙を剥いたヴィサ君を、通じ合っている心の声で制止する。これは私の戦いだ。誰にも譲らない。

アランはまるで自らの行動を恐れるように、手のひらを凝視していた。

「あ……」

正気に戻った彼が、私に近づこうとする。

「……近づかないでください」

感情を押し殺した私の声に、びくりと彼の動きが止まった。

「気に入らない下民風情に自ら手を下したと知れば、都合が悪いのはどちらですか？」

落ち着け。私は彼を恨んだりしない。恨むぐらいなら、あますところなく利用してやる。

「何を……」

「今、あなたがなさった仕打ち、黙っておいて差し上げることができません。あなたがその口に鍵をかけて、私に協力してくださいというのなら」

腐っても、私の存在は国王陛下直々の肝入りだ。

それを力ずくで排そうとしたとなれば、アランでもお咎めなしではいられないだろう。動揺しているのか、彼は信じられないという目で私を見ていた。

普段冷静で判断力に自信がある人間ほど、茫然自失となれば途端にガードが緩む。

この好機を逃すわけにはいかない。

「力を貸していただきますよ。アラン・メリス様」

私はにっこりと笑った。彼を兄上と呼ぶことは、きつと金輪際ない。

\* ❖ \*

それは今から三年前。僕、アラン・メリスが九歳の春のことだ。ジーク兄上の部屋にいた時、激しいノックの音が響いたかと思うと、母の侍女であるメリダが転がりこんできたのである。

「坊ちゃん！」

メリダは昔、兄上の乳母をしていた年かさの使用人だ。しかし、だからといって、このように遠慮のない振る舞いをすることは珍しい。

「一体どうしたんだ、メリダ？」

兄上が問いかけると、メリダは我に返ったようにお辞儀をしたあと、足早に兄に詰め寄った。

「ナ、ナターシャ様がつ、リシエールお嬢様を放逐なさると！」